

## 第4回門真市魅力ある教育づくり審議会 各部会での意見（まとめ）

### ○つながりのある教育の創造部会での意見

- ・35人学級も含め、さらなるきめ細かな指導のための有効な施策はないかということで議論をした。多くの委員が言っていたのは、きめ細やかな指導には一人でも子どもが少ないという状況は大切だということである。しかし財政のことも考え、同じ金額ならそれだけの効果がしっかり出せることも考えても良いのではないかという意見もあった。
- ・現行の35人学級事業において、きめ細かな指導ができているという定性的な効果が十分に出ている反面、定量的な効果が出ているかどうかは明確には見えてこないという説明もあったことから、今後、学校の裁量で柔軟に活用できる人材を配置するなど、制度の改善も検討をして良いのではないか。
- ・教員の多忙感を少しでも解消するために、様々な仕事をしてもらえる人材を配置するのはどうか。例えばボランティアを学校に配置し、教室にいてもらうだけでも、かなり教育効果が上がるのではないか。
- ・知り合いの学校教員で過労死された方がおり、真面目に一生懸命になって相当な負担があったと聞く。教師の負担はどのようなところであって、それを解消するためには何が必要かという議論が大切である。
- ・教員、とりわけ担任は授業以外に保護者対応や事務仕事が多い。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の人材を積極的に増やすなどして、子どもたちのサポートに当たってくれたら、担任の負担も減るのではないか。
- ・教員の悩みを聞くカウンセラーも学校に配置すれば、教員も心の負担が軽減され、ゆとりを持って子どもたちに対して、きめ細やかな指導に当たれるのではないか。
- ・人的環境だけではなく、廊下やトイレも綺麗であるなど、学校の設備も含め環境が整った学校の子どもたちは落ちついた様子になっている。
- ・事務局からのプレゼンテーションにあったような他市の義務教育学校のような学校が門真にもあったらよいと思う。

## 第4回門真市魅力ある教育づくり審議会 各部会での意見（まとめ）

- つながりのある教育ということ言えば、同じ職員室で1年生から9年生の教員が、9年間の子どもの育ちを連携して見ることができる施設一体型の学校が理想的であろう。
- 施設一体型にした時のデメリットとして、例えばいじめが起こった時にその人間関係で9年間過ごすということになりはしないかということや、当面は旧の小学校2校の文化の違いなど、馴染めない時期が続くのではないだろうかということ、子どもには一定成長の段階で超えられる程度の段差は成長するうえで必要ではないかということなどが挙げられる。
- 段差については思春期でもあり、親と話しなくなるような自然な形の段差が子どもたちにはある。今の6 - 3制が例えば4 - 3 - 2制になったとしても、4年生から5年生に上がるころ、あるいは6年生から7年生に上がるころで、学校として少し何か取組をすれば、1つ上に成長したんだなという意識が子どもたちに得られるのではないか。4年生から5年生になる段階で教科担任制等を取り入れるという措置もできるのではないか。
- 門真市でも小中の一貫教育を推進しており効果は上がっているが、学期に1回とか夏季休業中などに会議を行っている。日常的な業務の中では、小中連携の一層の推進に向けては課題がある。
- 門真市においても、学力の向上とか、地域の防災拠点になるなど、地域へのメリットが発揮できるような義務教育学校がモデル校としてできたら良い。
- 今後義務教育学校等の事例も紹介していただいて、もう一度議論したい。

## 第4回門真市魅力ある教育づくり審議会 各部会での意見（まとめ）

### ○子どもの学ぶ意欲向上部会での意見

- ・35人学級について、学力の低位層が減っているのかどうかといった点でもデータを見ていく必要がある。同じ学年集団を継続的に追っていくデータがもう少し蓄積されないと、今のデータだけでは十分に成果検証できないだろう。効果を判断するには時期尚早かも知れない。
- ・実験等であれば、少人数であれば机間指導が行いやすい。人数が40人ぐらいに増えると、教室の空間の空具合も狭くなり、雑然となることもある。
- ・1クラスで少人数というのは、寂しい状況もあるので、クラスの人数が多くても複数の先生で入った方がいいのではないか。
- ・クラス人数が頻繁に変わるのではなく、ある程度安定して継続した方がいいのではないか。
- ・中学校では、教室に入り辛い生徒が通う校内適応指導教室等に5、6人の教員が付いているという現状があり、専門の人材がいると助かる。
- ・中学校では35人学級事業によって、学級数が増えることで教員の授業時数が増えてしまう。学校によって加配教員をどのように使いたいのかについては状況が違うので、学校の裁量・自由度を高める必要がある。
- ・中学校の場合は少人数にして、例えばクラス数を4クラスから5クラスにした場合、同じ教科を別の教員が指導することになり、評価の仕方とか授業方法がずれることもあり得る。
- ・小学校では、1クラスだけでずっと学年が進むと、子どもどうしあるいは教員との人間関係が固定化されてしまうという弊害があるのではないか。
- ・子どもの主体的な学びの育成については、教科によって、子どもの学ぶ意欲の引き出しやすさが変わってくる。理科などであればもともと「不思議」「なぜ」という仕掛けを作りやすいが、数学の場合は例えば工作から入るなど、仕掛けを作るための準備が必要になる。英語の場合は話し合い活動を効果的に盛り込むことが重要である。また、学校によっては「英語プレゼンコンテスト」が学ぶ意欲の動機になっているところもある。

## 第4回門真市魅力ある教育づくり審議会 各部会での意見（まとめ）

- ・授業の導入が良くても、生徒にとっては学習意欲が十分にわかず、途中で学習自体をあきらめてしまう、くじけることもあるので、どのようにして粘り強い学習につなげていくのかが、必要になる。
- ・新しい学習指導要領の中で、主体性の項目として興味や関心を高める、見通しを持つ、粘り強く取り組む、振りかえって自覚するという4項目があるが、これは採用面接を行った側からすると、まさにこの項目が社会人の採用試験では問われるところで、小中学校からこれに取り組むことは意味がある。
- ・門真では外国につながる方々が多いということを強みにして、地域のボランティアを巻き込み、中国語や韓国語を勉強するという取組を行っても良いのではないか。
- ・教員が子どもたちに向き合う時間を作るために地域の力を生かし、教員が授業に専念できるような心の余裕を作ることが必要である。
- ・クラブ活動や生徒会行事等も上記の4項目の達成に資するものである。
- ・クラブ活動は子どもの主体性の伸長に有効だろうが、男女の区別があり、自分の子どもは希望のクラブに入れず、試合に出ることもかなわない。他校の練習に合同で参加することも難しい状況がある。
- ・現状では中学校によってクラブの数や種目は違うので、サッカーがしたくても、自分の行く学校にはそのクラブがないこともある。
- ・クラブを中心に学校が選べるという状況になったとして、これまでの小学校での人間関係を継続して、やりたいクラブがなくとも地元の学校に行くのか、それもとやりたいクラブを重視して別の中学校を選ぶのかという問題がある。自宅からの距離のこともあり、選択できる状況ができたとしても、どれほどの人数が動くか予想するのは難しい。
- ・土日のクラブ活動に地域の人材等を活用して、引率等を頼めるのであれば、教員のライフスタイルそのものが変わるぐらい助かるのではないか。ただし、外部人材による生徒指導等は難しい場合もあるので、運用面では気をつける必要がある。